自然体験活動指導に求められる教員の資質能力に関する調査研究

別惣淳二　長澤憲保　上西一郎　一山秀樹
（兵庫教育大学）　（兵庫県立教育研修所）

本稿は，兵庫県教育委員会における「自然学校」で受入側の社会教育施設の青少年教育指導者を対象にした調査を手がかりに，青少年教育を視野に入れた新たな学校教育実践で求められる教員の指導資質能力とそれを形成する新たな教員養成教育のあり方について解明しようとした。

その結果，青少年教育指導者の多くは，7つの指導資質能力が教員に求められると考えていた。また，9割以上の青少年教育指導者は，教職志望学生が自然体験や野外活動等を経験することの必要性を感じており，特に子どもの自然体験活動の指導補助経験が教員の指導資質能力の形成に有効であると捉えていた。

キーワード：自然学校，自然体験活動，教員の指導資質能力，青少年教育指導者

別惣　淳二：兵庫教育大学・学校教育研究センター・助教授，〒673-1421　兵庫県加東郡社町山国 2007-109，
E-mail: jbessou@ceser.hyogo-u.ac.jp
長澤　憲保：兵庫教育大学・学校教育研究センター・教授，〒673-1421　兵庫県加東郡社町山国 2007-109，
E-mail: nagasawa@ceser.hyogo-u.ac.jp
上西　一郎：兵庫教育大学・学校教育研究センター・助教授，〒673-1421　兵庫県加東郡社町山国 2007-109，
E-mail: uenishi@ceser.hyogo-u.ac.jp
一山　秀樹：兵庫県立教育研修所・指導主事，学校教育研究センター客員研究員（平成13年度，14年度），
〒673-1421　兵庫県加東郡社町山国 2006-107，
E-mail: hichiyama@hyogo-c.ed.jp

Research of Teachers' Qualities and Competences for Instructing Children's Camp Activities in Natural Settings

Junji Besso, Noriyasu Nagasawa, Ichiro Uenishi, and Hideki Ichiyama
(Hyogo University of Teacher Education) (Hyogo Prefectural Institute for Educational Research and In-servce Training)

This Article clarified teacher qualities and competences for instructing children's camp activities in natural settings, and the ideal of renewed pre-servive teacher education curriculum cultivating these teacher qualities and competences, by the use of survey for youth service instructors in social education facilities accepting "Shizen Gakko(School in Natural Settings)" Hyogo prefectural board of education conducts.

As a result, a lot of youth service instructors recognized that teachers need to have seven qualities and competences for instructing children's camp activities in natural settings, and felt it necessary for student of pre-service teacher education to experience camp activities in natural settings. They thought the experience of instructing children's camp activities in natural settings is effective for cultivating teacher qualities and competences as teaching profession.

Key Words: School in Natural Settings, Camp Activities in Natural Settings, Teacher's Qualities and Competences for Instructing Children, Youth Service Instructor

Junji Besso is a Associate Professor of the Center for School Educaton Research at Hyogo University of Teacher Education. Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1421, Japan. E-mail: jbessou@ceser.hyogo-u.ac.jp

Noriyasu Nagasawa is a Professor of the Center for School Educaton Research at Hyogo University of Teacher Education. Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1421, Japan. E-mail: nagasawa@ceser.hyogo-u.ac.jp

Ichiro Uenishi is a Associate Professor of the Center for School Educaton Research at Hyogo University of Teacher Education. Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1421, Japan. E-mail: uenishi@ceser.hyogo-u.ac.jp

Hideki Ichiyama is a Supervisor of Hyogo Prefectural Institute for Educational Research and In-servce Training, Yamakuni, Yashiro-cho, Kato-gun, Hyogo, 673-1421, Japan. Visiting Research Scholar, Hyogo University of Teacher Education. E-mail: hichiyama@hyogo-c.ed.jp

1　研究の目的

少子化や都市化の進展，環境問題への関心の高まり，家庭や地域社会の教育力の著しい低下など，子どもたちを取り巻く社会環境の急速な変化を背景に，いじめ，不登校，校内暴力，学級崩壊，凶悪な青少年犯罪の続発などの深刻な教育問題が増加している今日，学校教育は，家庭や地域社会とのより一層の連携強化が求められるなかで，子どもたちに豊かな人間性を育む新しい教育のあり方への対応を余儀なくされている[1]。

平成14年度より完全学校週5日制の下に全国の小学校で全面実施された新学習指導要領では，子どもたちの豊かな人間性と社会性を育成するために，「ボランティア活動や自然体験活動などの体験的な活動の充実」[2]を学校現場に求めている。また，平成13年7月に公布・施行された学校教育法第18条の2では，「小学校，中学校，高等学校等において，社会奉仕体験活動，自然体験活動等の体験活動の充実に努めるものとするとともに，社会教育関係団体等の関係団体，関係機関との連携に十分配慮するものとする」と規定された。そうした体験活動重視の底流には，子どもたちを取り巻く環境の変化と子どもたちの生活体験や自然体験等の不足という現状認識がある。

しかし，今日にあっては，子どもだけでなく，教員や教員をめざす学生に豊富な生活体験や自然体験が不足していると指摘する教育関係者も少なくない。実際に，教員自身が自然体験の楽しさや喜びを数多く経験していなければ，学校が実施する野外教育プログラムにおける自然体験の重要性や教育的意義が理解できず，指導者として子どもたちにその楽しさや喜びを伝授できないとも言われている[3]。そのため，教員や教員をめざす学生が自然体験活動や野外活動等を経験する機会の拡充が今後の重要な課題となっている。しかし，その場合に，教員が今後より積極的に子どもたちの自然体験活動や野外活動の指導に関わっていくと仮定すれば，教員にどのような指導資質能力が新たに求められるようになるのか，さらには教員の専門性の向上という観点から，どのような経験が教員や教員をめざす学生のどのような指導資質能力の形成に繋がるのかを見定めて今後の教員養成教育のあり方を考えていく必要がある。

そこで，本研究では，兵庫県教育委員会が全国に先駆けて昭和63年から取り組んでいる「自然学校」[4]において，受入側の社会教育施設で子どもたちに自然体験活動の指導を行っている青少年教育指導者の意識に注目する。「自然学校」受入施設の青少年教育指導者の視点から，今後，自然体験活動において教員に求められる指導資質能力のあり方を捉えることによって，教員には見えてこないより客観的な内容の把握が可能になると考えられるからである。また，本学の学部学生のうち兵庫県出身者が約6割を占め，卒業後に兵庫県教員として就職する可能性を考えれば，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者が教員に求める指導資質能力を明らかにすることは，「個性のある教師」，「得意分野をもつ教師」という新しい教師像を求めて本学の養成教育のあり方を検討する上で非常に有益であると考えられる。

ところで，自然学校に関する研究は，主に兵庫県立南但馬自然学校等によって行われてきたが，自然学校に参加した子どもや学級担任を対象とした質問紙調査から，それぞれの意識の変化等を通して自然学校の効果や実態を明らかにしたものであり[5]，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者の視点から子どもの自然体験活動指導に求められる教員の資質能力のあり方を問うものではなかった。一方，自然学校以外の自然体験活動に関する研究でも，自然体験活動に参加する子どもに焦点を当てた研究が多く，教員の指導資質能力に注目した研究はほとんどない[6]。

本研究の目的は，「自然学校」受入施設における青少年教育指導者が，社会教育・青少年教育指導を視野に入れた新しい学校教育の実現と充実を仮説的に構想する場合，子どもの自然体験活動や野外活動等で教員にどのような指導資質能力が新たに必要になると認識しているのかを調査し，青少年教育を視野に入れた新たな学校教育実践で求められる教員の指導資質能力とその形成を促す養成教育のあり方について探究しようとするものである。

2　研究の内容と方法

本研究で取り扱う分析データは，予備調査「自然学校に関するアンケート調査」と本調査「子どもたちの自然体験活動において学校教員に求められる指導資質能力に関する調査」の2段階で実施して得られたデータに基づいている。

1．予備調査の実施と分析

予備調査及び本調査の実施手続きとしては，兵庫県教育委員会発行の『自然学校10周年記念誌』[7]を参考にして県内主要社会教育施設（宿泊施設と活用施設）と教育事務所を含む61ヶ所を選定し，1ヶ所につき5部ずつ質問紙を用意し，施設長宛で郵送した。施設長には青少年教育指導にあたっている職員一人ひとりに質問紙を配布していただくようお願いした。回答は無記名とし，記入後は各自が小封筒に入れ，それを施設長に回収してもらい，返送してもらう方式を採用した。

予備調査では，平成13年9月12日～同年10月10日の期間に「自然学校」受入施設の青少年教育指導者に対して，「現在，引率指導等を行っている教員に対して，今後，

より積極的に教員が自然学校において自然体験活動や野外活動の指導等に関わっていくことになると仮定すれば，教員にどのような指導資質能力が求められるようになると思いますか」という質問内容を設定し，自由記述方式で回答を求めた。総配布数は305で，有効回答者数は124名（有効回答率：40.7%）であった。

回収された自由記述回答は，４名の共同研究者がＫＪ法を用いて記述分析を行い，自然体験活動や野外活動等の指導で教員に求められる39項目の指導資質能力を抽出した。

２．本調査の実施と分析

予備調査の記述分析によって抽出された39項目を本調査の質問項目として採用し，平成14年１月16日～同年２月５日の期間に予備調査と同様の実施手続きに従って，本調査（質問紙調査）を行った。本調査では，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者に対して，①今の教員は自然体験活動や野外活動等の経験が不足しているのか，②子どもの自然体験活動の指導では教員にも指導資質能力が求められるのか，③子どもの自然体験活動の指導ではどのような教員の指導資質能力が重要になるのか，④教職志望学生が在学中に自然体験活動や野外活動を経験する必要があるのか，⑤教職志望学生が子どもの自然体験活動や野外活動に参加したり，指導補助をすることはどのような意味があるのかについて回答を求めた。総配布数は305で，有効回答者数は170名（有効回答率：55.7%）であった。以下の分析では，本調査によって得られたデータを用いた。なお，有効回答者の基本属性は，表１に示すとおりである。

3　分析の結果及び考察

１．教員の自然体験や野外活動等の経験不足とその理由

まず初めに，予備調査の回答のなかに「今の教員は，自然体験や野外活動等の経験そのものが不足している」という記述があったことから，再び「自然学校」受入施設で青少年教育指導者に「教員の自然体験や野外活動等の経験不足」についてどう思うかをたずねてみた結果が，表２である。

その結果によれば，「そう思う」が26.8%，「どちらかといえばそう思う」が32.7%で，両方を併せると約６割の回答者が肯定的に「そう思う」と回答していた。この結果から一概に教員が経験不足であると結論づけることはできないが，子どもの場合と同様に，教員もまた自然体験や野外活動等の経験が相対的に不足傾向にあることはほぼ間違いない。そこで，教員の経験不足について「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」に回答した人に，そう思う理由を自由記述方式で回答を求めた。その記述をＫＪ法によって分析した結果を示したものが図１である。

表１　本調査のフェースシート

	N	%		N	%
性別			現在の勤務施設		
男性	142	83.5	教育事務所	10	5.9
女性	27	15.9	宿泊施設(独立行政法人立拠点施設)	11	6.5
無答	1	0.6	宿泊施設(県立拠点施設)	46	27.0
年齢			宿泊施設(市町村組合立拠点施設)	55	32.4
20歳代	19	11.2	活用施設(宿泊を伴わない活用のみの施設)	40	23.5
30歳代	34	19.9	市教育委員会	5	2.9
40歳代	62	36.5	無答	3	1.8
50歳代以上	54	31.8	自然体験活動における指導経験年数		
無答	1	0.6	０～３年	72	42.3
教職経験の有無			４～10年	51	29.9
ある	78	45.9	11～20年	9	5.4
1～10年	9	5.3	21～30年	3	1.8
11～20年	36	21.2	31～40年	2	1.2
21～30年	13	7.6	40年以上	1	0.6
31～40年	11	6.5	無答	32	18.8
無答	9	5.3	合　　計	170	100.0
ない	83	48.8			
無答	9	5.3			

表２　今の教員の自然体験や野外活動等の経験不足について

	そう思う	どちらかといえばそう思う	そう思わない	どちらかといえばそう思う	わからない	合計
N	45	55	30	5	33	168
%	26.8	32.7	17.9	3.0	19.6	100.0

（注）無答は，省いて統計処理した。

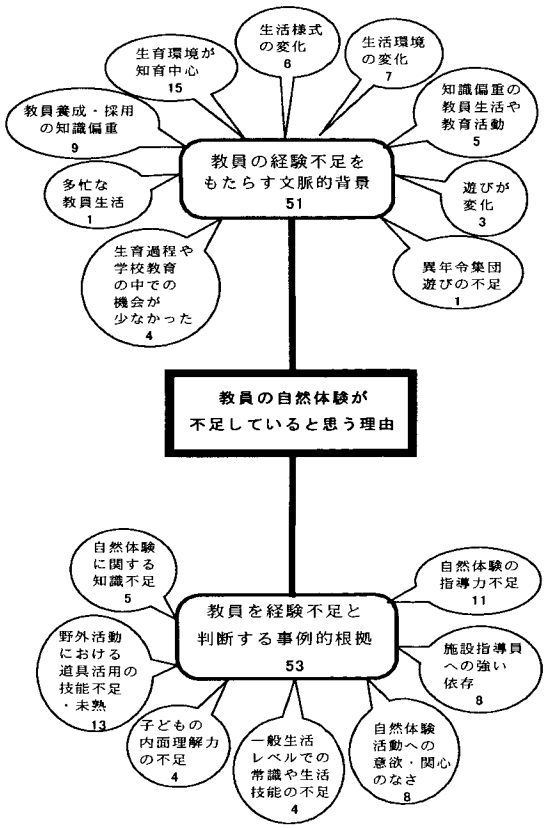

図１　今の教員は自然体験や野外活動の経験が不足していると思う理由

1つめは，「生育環境が知育中心」，「教員養成・採用の知育偏重」，「生活環境の変化」，「生活様式の変化」，「知識偏重の教員生活や教育活動」，「成育過程や学校教育の中での機会が少なかった」，「遊びが変化」，「多忙な教員生活」，「異年令集団遊びの不足」といった記述群が，今の教員の自然体験不足をもたらす文脈的背景を意味しているので，これらの記述群を「教員の経験不足をもたらす文脈的背景」と命名した。

もう1つは，「野外活動における道具活用の技能不足・未熟」，「自然体験の指導力不足」，「施設指導員への強い依存」，「自然体験活動への意欲・関心のなさ」，「自然体験に関する知識不足」，「子どもの内面理解力の不足」，「一般生活レベルでの常識や生活技能の不足」といった記述群が，社会教育施設に子どもたちの引率指導等で来た教員の実際の様子や態度等を見ていて経験不足だと感じた実際的事例に基づいているので，これらの記述群を「教員を経験不足と判断する事例的根拠」と命名した。

これらの結果から，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者は，教員の自然体験や野外活動等の経験が不足していると思う理由として，教員の経験不足をもたらす「文脈的背景」と教員を経験不足と判断する「事例的根拠」の両面から相互補完的に認識していると考えられる。この認識に従えば，教員の経験不足は，教員の生育環境が知育中心で，学校教育の中での機会が少なかった点と，教員養成・採用が知育偏重で，採用後も知育偏重の教員生活や教育活動に従事している点を文脈的背景として生起しており，その経験不足は「野外活動における道具活用の技能不足・未熟」や「自然体験の指導力不足」，「施設指導員への強い依存」，「自然体験活動への意欲・関心のなさ」となって現れているようである。

このことから，今後，教員の経験不足を改善するためには，子どもの頃に自然体験や野外活動等を経験する機会を増やすだけでなく，大学の教員養成や現職研修において教員のために自然体験や野外活動等を経験させる機会を増やすことが課題になるだろう。

2．子どもの自然体験活動における教員の指導資質能力の必要性

そうした教員の自然体験不足の実態に対して，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者は，教員にも子どもたちの自然体験活動の指導にかかわる資質能力を身につけておいてほしいと望んでいるのか，それとも子どもたちの指導は社会教育施設の専門指導員に任せてほしいと望んでいるのかを把握しておく必要がある。このことは同時に，教員の自然体験や野外活動等の経験不足についての是非を問うことにもなるからである。

そこで，予備調査において「子どもたちの自然体験や野外活動等の指導は，各施設の担当者や指導員に任せるべきであって，教員には特に求める指導資質能力はない」という意見もあったがどう思うかという質問をし，回答を求めた。その結果が表3である。

表3　指導は専門指導員に任せるべきで，教員に求める指導資質能力はないことについて

	そう思う	どちらかといえばそう思う	そう思わない	どちらかといえばそう思う	わからない	合計
N	11	13	112	22	9	167
%	6.6	7.8	67.1	13.2	5.3	100.0

（注）無答は，省いて統計処理した。

その結果によれば，「そう思わない」が67.1%，「どちらかといえばそう思わない」が13.2%であり，両方を併せると80.3%の回答者が「そう思わない」の方向で回答していた。つまり，「自然学校」受入施設の青少年教育指導者の多くは，子どもの自然体験活動の指導では教員にも何らかの指導資質能力が必要であり，教員を自然体験や野外活動等の経験不足のままにしておくべきではないと考えているようである。

3．自然体験活動指導に求められる教員の指導資質能力

（1）因子分析による下位尺度の作成

「自然学校」受入施設の青少年教育指導者の多くは，教員にどのような指導資質能力が必要であると考えているのだろうか。そのことを明らかにするために，先の質問で，「そう思わない」，「どちらかといえばそう思わない」，「わからない」のいずれかに回答した人を対象に，「もし今後より積極的に教員が子どもたちの自然体験活動や野外活動プログラムの指導等に関わっていくことになるとすれば，教員にどのような指導資質能力が求められると思いますか」と問いかけ，予備調査から得られた「自然体験活動の指導で教員に求められる39項目の指導資質能力」を重要度の5段階尺度（「1.重要でない」，「2.あまり重要でない」，「3.どちらともいえない」，「4.少し重要である」，「5.重要である」）で回答を求めた。そこで得た回答から，教員に求められる指導資質能力の因子抽出と尺度化を試みた。

自然体験活動の指導で教員に求められる39項目の指導資質能力について，各項目間の相関行列に基づいて，共通性の初期値を1とした主因子法による因子分析を行った。バリマックス回転を行い，固有値の変化の様子を考慮して，因子数を8から5まで順次変化させて因子抽出を試みた。その結果，各因子の解釈可能性等から，7つの因子を主因子解とし，.40以上の因子負荷量を示す項目を採用した。これらの7因子に対する累積因子寄与率は55.6%であった。表4は，バリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。

表4　子どもたちの自然体験活動指導に求められる教員の指導資質能力（バリマックス回転後）

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	h^2
5 子どもの指導への意欲・主体性	.82	.10	.15	-.12	.12	.02	.04	.73
31 参加する子どもたちをまとめる能力	.71	.24	.04	.15	.13	.12	.04	.63
27 子どもに生活習慣，社会的ルールを指導する能力	.70	.14	.06	.14	.20	.09	-.06	.58
37 目標達成のための連絡調整能力	.61	.31	.18	.28	.12	.18	.19	.66
33 自然体験活動プログラムの企画・運営に対する教員間の共通理解	.56	.42	.07	.27	.14	.13	.04	.60
16 子どもへの指導に関する知識	.52	.23	.29	.06	.17	.08	.14	.46
34 計画どおりに進まなかった際の判断力	.50	.41	.08	.17	.16	.05	.25	.55
29 子どもの自然体験活動に対する意義と価値の理解	.45	.33	.21	.36	-.09	.37	-.13	.65
25 社会教育の目的・意義の認識	.43	.22	.34	.31	.29	-.04	-.03	.53
35 子どもたちを自主的に行動できるように促す能力	.42	.37	.21	.22	.36	.01	-.21	.57
32 事故等への応急処置に関する知識	.11	.70	.22	.05	.11	.08	-.10	.58
17 教員自らの野外活動，応急処置に関する基礎的な技術	.07	.64	.24	.07	.14	.03	.10	.51
30 子どもの安全・保健面における判断力	.38	.63	.06	.21	.12	.22	-.04	.65
38 一般社会人としてのマナーと常識をもつこと	.35	.56	.04	.05	.04	.15	.16	.49
18 教員自らが健康管理ができること	.08	.56	.28	.10	.16	.01	.32	.53
11 子どもへの安全指導の能力	.32	.55	.05	-.06	.20	.13	.22	.52
23 子どもの心をケアする能力	.17	.53	.20	.21	.27	.25	-.02	.52
15 子どもが危険な場面，事故等に遭遇した場合の対応能力	.13	.42	.02	.07	.13	.14	.06	.24
12 動植物，森林等の自然に関する知識	.15	.04	.73	.07	-.01	.18	.17	.62
24 自然体験活動を実施する場（海・山）の知識	.19	.45	.60	.02	.04	.13	.08	.63
13 子どもの自然観察・自然理解を指導する技術	.32	.13	.58	.27	-.04	.12	.09	.55
8 自然環境の保全と活用に関する知識	-.01	.25	.56	.07	.10	.07	.28	.48
20 野外活動に関する知識	.33	.28	.50	.35	.21	.20	.03	.63
28 自然の中から情報を読み取る能力	.07	.26	.42	.25	.19	.34	-.15	.48
2 教員自身に自然観察や野外活動等の経験があること	-.00	-.03	.42	.35	.06	.22	.20	.39
22 自然体験活動プログラムを企画・開発する能力	.22	.23	.26	.76	.02	.20	.07	.79
21 子どもに野外活動を指導する能力	.44	.16	.34	.53	.13	.13	.14	.67
9 子どもにレクリエーションやゲーム等を指導する技術	.42	-.02	.20	.43	.13	.04	.36	.55
4 人権に配慮し，言葉遣いが正確で丁寧であること	.26	.15	.27	.02	.69	.00	.02	.64
6 危機的状況に対する対応を予見しながらプログラムを推進する能力	.19	.29	-.08	.01	.53	.04	.23	.46
3 活動に協力してもらう人々との対人関係づくり能力	.06	.28	.01	.07	.51	.18	.07	.38
14 教員の性格が明るいこと	.37	-.09	.05	.24	.44	.15	.20	.46
19 参加する子どもたちの相互人間関係づくりを支援する能力	.42	.37	-.08	.25	.43	.17	.06	.59
26 プログラムの企画段階で状況の変化を予見する能力	.27	.27	.11	.39	.42	.30	.00	.58
39 自然に関する興味・関心をもつこと	.21	.25	.26	-.05	.02	.70	.14	.69
1 自然体験活動への情熱	.09	.05	.24	.15	.20	.59	-.06	.48
36 自然体験を教員自らが楽しめる感覚，構え	.05	.28	.04	.24	.11	.57	.17	.51
7 教員自身に体力があること	.04	.08	.41	.13	.09	.00	.67	.65
10 教員自身が元気であること	.17	.27	.20	.03	.15	.14	.52	.46
因子寄与率（%）	13.2	12.0	8.7	6.2	6.1	5.3	4.1	55.6

（注）項目の番号は，質問紙調査票の番号をそのまま用いた。

第1因子（10項目）は，子どもたちの自然体験活動プログラムやその目的・意義に対する共通理解と子ども集団を指導する能力や意欲を表している項目が多いことから，「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」の因子と命名した。

第2因子（8項目）は，子どもたちの安全管理や安全指導の能力と知識を表している項目が多いことから，「安全管理・安全指導の能力・知識」の因子と命名した。

第3因子（7項目）は，自然体験や野外活動等に関する知識を表している項目が多いことから，「自然体験活動に関する知識」の因子と命名した。

第4因子（3項目）は，自然体験活動や野外活動のための企画力と指導技術を表していることから，「自然体験活動のための企画・指導技術」の因子と命名した。

第5因子（6項目）は，自然体験活動プログラムを推進するための状況予測力・予見力とプログラムに参加する人々との良好な人間関係づくりを表している項目が多いことから，「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」の因子と命名した。

第6因子（3項目）は，自然体験活動への関心や意欲を表していることから，「自然体験活動への関心・意欲」の因子と命名した。

第7因子（2項目）は，教員の体力や健康を表していることから，「体力・健康」の因子と命名した。

これらの分析結果に基づき，各因子ごとにCronbackのα係数を算出した。第1因子で.90，第2因子で.86，第3因子で.87，第4因子で.81，第5因子で.76，第6因子で.66，第7因子で.63という数値が得られ，第6因子と第7因子の値がやや低いものの，ほぼ良好な内的整合性が確認された。

したがって，自然体験活動の指導で教員に求められる39項目の指導資質能力については，「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」因子（得点レンジ：10～50），「安全管理・安全指導の能力・知識」因子（得点レンジ：8～40），「自然体験活動に関する知識」因子（得点レンジ：7～35），「自然体験活動のための企画・指導技術」因子（得点レンジ：3～15），「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」因子（得点レンジ：6～30），「自然体験活動への関心・意欲」因子（得点レンジ：3～15），「体力・健康」因子（得点レンジ：2～10）の7つの下位尺度が作成された。つまり，県内「自然学校」受入施設の青少年教育指導者が教員に求めている指導資質能力は，これら7つの下位尺度によって構成されていることが明らかになった。

（2）自然体験活動指導において教員に求められる指導資質能力の重要度比較

これら7つの下位尺度を用いて，回答者による各因子の重要度を把握する。まず，各因子の項目数に基づいて5段階尺度の回答から単純に因子合計得点とその平均を算出する。各因子の得点レンジは，項目数に従属して異なっているが，各因子の比較がしやすいように得点レンジを揃えるため，この因子合計得点の平均値を因子ごとの項目数でわり算をし，その得点を下位尺度得点とすると，すべての下位尺度得点の得点レンジが1～5となる。この手続きに従って，各因子の因子合計得点と下位尺度得点の平均値と標準偏差を算出した結果が，表5である。

この結果から，重要度の5段階尺度（「1.重要でない」，「2.あまり重要でない」，「3.どちらともいえない」，「4.少し重要である」，「5.重要である」）の観点から解釈すると，すべての下位尺度得点が3.50以上の平均値を示していることから，すべての因子が「重要である」の方向で回答されていることが分かる。しかし，各因子ごとを比較すると重要度に違いがある。最も重要度が高いのは4.50の「安全管理や安全指導の能力・知識」因子であり，次に4.44で「自然体験活動への関心・意欲」因子が高い。その次には「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」因子が4.31，「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」因子が4.29，「体

表5　学校教員の指導資質能力の因子合計得点及び下位尺度得点

因子名	項目数	人数	因子合計得点 Mean(SD)	下位尺度得点 Mean(SD)
自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力	10	135	42.86(6.05)	4.29(0.61)
安全管理や安全指導の能力・知識	8	137	36.00(3.62)	4.50(0.45)
自然体験活動に関する知識	7	136	28.30(4.27)	4.04(0.61)
自然体験活動のための企画・指導技術	3	141	11.69(2.35)	3.90(0.78)
プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力	6	139	25.88(3.26)	4.31(0.54)
自然体験活動への関心・意欲	3	133	13.32(1.65)	4.44(0.55)
体力・健康	2	141	8.31(1.58)	4.16(0.79)

（注）下位尺度得点は，因子合計得点を項目数で割ったものである。

力・健康」因子が4.16,「自然体験活動に関する知識」が40.4と続いている。以上の因子は下位尺度得点が4.00以上の平均値を示したが,「自然体験活動のための企画・指導技術」因子のみが3.90で4.00以下となった。

これらの結果から分かることは,「安全管理や安全指導の能力・知識」や「自然体験活動への関心・意欲」は自然体験活動で子どもたちに指導する際,必ず学校教員に身につけておいてほしい指導資質能力であるということである。また,「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」,「自然体験活動プログラムへの共通理解と集団指導力」,「体力・健康」「自然体験活動に関する知識」は,先の2因子ほどではないが,もし学校教員が今後より積極的に子どもたちの自然体験活動等の指導に関わるならば,必要とされる指導資質能力であると考えられる。さらに,「自然体験活動のための企画・指導技術」は,子どもたちの自然体験活動等の指導で学校教員に求められる指導資質能力には違いないが,必ずしも学校教員が身につけておかなければならない指導資質能力ではなく,場合によっては社会教育施設における青少年教育指導者等の専門家の支援・援助を得ることが望ましいという回答であると推察される。

ここで,平成13年に兵庫県立南但馬自然学校が「自然学校」で引率指導を行った小学校の学級担任全員を対象に実施した質問紙調査によれば,「自然学校で,教師に必要な資質は何だと思いますか」という質問に対して,「企画力」(44%)と回答した学級担任が最も多く,次に「判断力」(43%),「体力」(34%),「豊富な自然体験」(24%)が多く,以下,「調整力」(18%),「生徒指導力」(15%),「技術指導力」(7%),「協調性」(5%),「事務処理能力」(4%)と続く結果が得られている[8]。

この「自然学校」学級担任の意識調査と,本研究で実施した「自然学校」受入施設の青少年教育指導者の意識調査とでは,調査の前提となるものが異なるため,単純に比較することはできないが,今後教員がより積極的に子どもの自然体験活動等の指導に関わっていくことになれば,今以上に「安全管理や安全指導の能力・知識」,「自然体験活動への関心・意欲」,「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」,「自然体験活動プログラムへ共通理解と集団指導力」,「自然体験活動に関する知識」といった指導資質能力が教員に求められるようになることを意味している。というのも,県立南但馬自然学校が行った調査結果では,学級担任が「自然学校」実施中に困ったことの上位5つとして,「健康安全」(31%),「プログラムのスムーズな実施」(30%),「プログラムでのゆとりの確保」(28%),「児童の観察・指導」(22%),「指導教師の体制づくり」(19%)があげられており[9],これらの内容が今回の我々の調査結果である,社会教育施設の青少年教育指導者が教員に求める指導資質能力にも現れていると考えられるからである。

4. 教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動等を経験することの必要性

つぎに,養成教育のあり方として,「自然学校」受入施設の青少年教育指導者は,教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動等を経験することの必要性をどのように考えているのかを把握するために,「子ども時代に自然体験や野外活動等の経験があろうとなかろうと,教員志望の大学生には,在学中に自然体験や野外活動等の経験をもってほしいですか」という設問を設け,3件法(「はい」,「いいえ」,「わからない」)で回答を求めた。その結果を表したものが,表6である。

表6 教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動等を経験することの必要性について

	はい	いいえ	わからない	合計
N	150	1	13	164
%	91.5	0.6	7.9	100.0

(注)無答は,省いて統計処理した。

表6より,「はい」に回答した人は91.5%であった。この結果から,子ども時代に自然体験や野外活動等の経験があろうとなかろうと,教員をめざそうとする学生には,在学中に自然体験や野外活動等の経験をもってほしいという強い要望があることが明らかになった。

5. 教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動への参加経験をもつことの意味

そこで,子ども時代に自然体験や野外活動等を経験した教職志望学生が,在学中に再び自然体験や野外活動等に参加する経験をもつことの意味をどのように捉えているのかについて自由記述方式で回答を求めた。得られた自由記述をKJ法を用いて分析したところ,図2に示す結果が得られた。

1つめは,「指導者の立場から学ぶ」,「指導技術・技能・能力」,「子どもの興味をひく豊かな指導力」,「子どもの見方・捉え方がわかる」,「情熱・意欲・態度」,「継承したいものがもてる」,「体験の客観化・理論化」,「子どもの興味・関心や感性がわかる」,「判断力」,「指導への構想力」といった記述群が,教員になることを意識して子どもへの指導のための予備的資質能力を身につけることになることを意味しているので,これらの記述群を「指導に向けての予備的資質能力」と命名した。

2つめは,「認識・意識や視点が違う」,「新しい発見がある」,「感じ方や感覚が違う」,「教育者志望の立場からの異なった経験となる」といった記述群が,子どもの頃とは違った意識で自然体験や野外活動を経験することになることを意味しているので,これらの記述群を「子

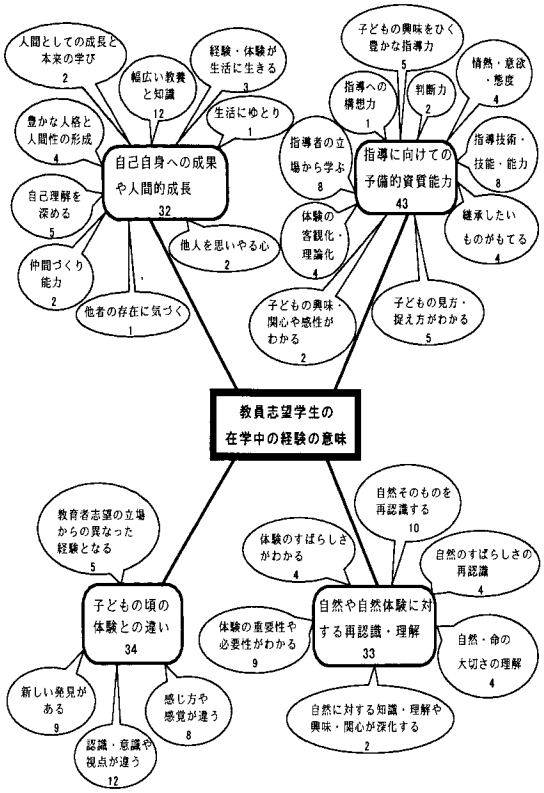

図2　子ども時代に経験した教員志望学生が在学中に再び自然体験や野外活動を経験することの意味

どもの頃の体験との違い」と命名した。

3つめは，「自然そのものを再認識する」，「体験の重要性や必要性がわかる」，「自然のすばらしさの再認識」，「自然・命の大切さの理解」，「体験のすばらしさがわかる」，「自然に対する知識・理解や興味・関心が深化する」といった記述群が，自然や自然体験に対して再認識したり，理解を深めることになるという意味で共通しているので，これらの記述群を「自然や自然体験に対する再認識・理解」と命名した。

4つめは，「幅広い教養と知識」，「自己理解を深める」，「豊かな人格と人間性の形成」，「経験・体験が生活に生きる」，「人間としての成長と本来の学び」，「他人を思いやる心」，「仲間づくり能力」，「他者の存在に気づく」，「生活にゆとり」といった記述群が，自己自身への成果として，あるいは自己自身の人間的成長としての意味において共通しているので，これらの記述群を「自己自身への成果や人間的成長」と命名した。

これらの結果から，子ども時代に自然体験や野外活動等を経験した教職志望学生が，在学中に再び自然体験や野外活動等に参加する経験をもつことは，「指導に向けての予備的資質能力」，「子どもの頃の体験との違い」，「自然や自然体験に対する再認識・理解」，「自己自身への成果や人間的成長」といった4つの意味があることが見出された。このうち，「指導に向けての予備的資質能力」は他の3つよりも記述件数が多いことからも分かるように，教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動等への参加経験をもつことは，教員に求められる指導資質能力の形成に向けての第一歩となると考えられている。同様に，教員養成課程における自然体験実習の意義を明らかにした濁川・柴田も，自然に身をおいて自然を丸ごと体験することが，将来教員になって日々の教育活動を構想していく上で欠くことのできない基礎的経験の一つであることを学生に理解させる機会になったと結論づけている[10]。それらが意味することは，次に件数が多かった「子どもの頃の体験との違い」にも表れている。つまり，子どもの頃と同じような自然体験や野外活動等の参加経験であっても，教職を目指す立場からは得るものが異なることを意味しており，そこに教職志望学生が再び経験する必要性の理由が隠されていると考えられる。

6．教職志望学生が自然体験活動の指導補助としての経験をもつことの意味

さらに参加経験を一歩進めて，教職志望学生が在学中に子どもの自然体験活動プログラムで指導補助者としての経験をもつことにどのような意味があるのかについて自由記述方式で回答を求めた。得られた自由記述をＫＪ法を用いて分析したところ，図3に示す結果が得られた。

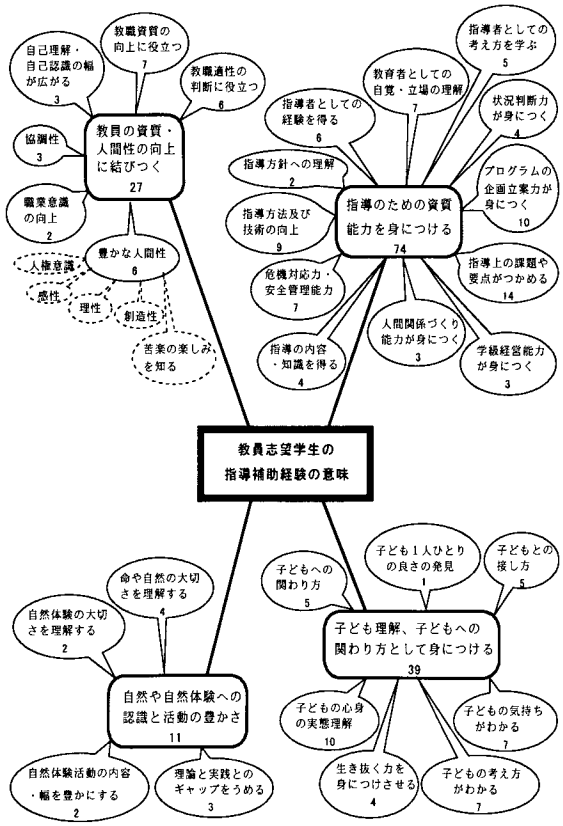

図3　教員志望学生が在学中に自然体験や野外活動の指導補助員としての経験をもつことの意味

1つめは,「指導上の課題や要点がつかめる」,「プログラムの企画立案力が身につく」,「指導方法及び技術の向上」,「危機対応力・安全管理能力」,「教育者としての自覚・立場の理解」,「指導者としての経験を得る」,「指導者としての考え方を学ぶ」,「状況判断力が身につく」,「指導の内容・知識を得る」,「人間関係づくり能力が身につく」,「学級経営能力が身につく」,「指導方針への理解」といった記述群が,実際の子どもたちの指導のために必要な資質能力を身につけるという意味で共通しているので,これらの記述群を「指導のための資質能力を身につける」と命名した。

2つめは,「子どもの心身の実態理解」,「子どもの気持ちがわかる」,「子どもの考え方がわかる」,「子どもへの関わり方」,「子どもとの接し方」,「生き抜く力を身につけさせる」,「子ども一人ひとりの良さの発見」といった記述群が,子ども理解や子どもへの関わり方として身につけるという意味で類似しているので,これらの記述群を「子ども理解,子どもへの関わり方として身につける」と命名した。

3つめは,「教職資質の向上に役立つ」,「教職適性の判断に役立つ」,「豊かな人間性」,「自己理解・自己認識の幅が広がる」,「協調性」,「職業意識の向上」といった記述群が,学校教員の資質・人間性の向上に結びつくという意味で共通していたので,これらの記述群を「学校教員の資質・人間性の向上に結びつく」と命名した。

4つめは,「命や自然の大切さを理解する」,「理論と実践とのギャップをうめる」,「自然体験の大切さを理解する」,「自然体験活動の内容・幅を豊かにする」といった記述群が,自然や自然体験への認識を豊かにしたり,自然体験活動そのものを豊かにするという意味で共通しているので,これらの記述群を「自然や自然体験への認識と活動の豊かさ」と命名した。

以上の結果から,教職志望学生が,在学中に子どもの自然体験活動プログラムの指導補助者としての経験をもつことは,「指導のための資質能力を身につける」,「子ども理解,子どもへの関わり方として身につける」,「学校教員の資質・人間性の向上に結びつく」,「自然や自然体験への認識と活動の豊かさ」といった4つの意味があることが見出された。これら4つの意味のうち,とりわけ「指導のための資質能力を身につける」の件数が74件で最も該当する記述が多かった。例えば,件数が多かった「指導上の課題や要点がつかめる」,「プログラムの企画立案力が身につく」,「指導方法及び技術の向上」,「危機対応力・安全管理能力」等の記述群の内容からも分かるとおり,教職志望学生の指導補助経験が子どもの自然体験活動で求められる指導資質能力の形成に直接寄与することを表している。

これらの結果を踏まえて,教職志望学生が在学中に自然体験や野外活動等の参加経験を持つことと,そうした自然体験活動に指導補助者として関わる経験をもつことの意味を比較すると,次の4点に差異が見出される。

1つは,指導補助者としての経験は,参加経験よりも教員として子どもたちの自然体験活動を指導するための資質能力をしっかりと身につけさせ,学校内での指導力の向上も期待できることである。

2つは,参加経験では意図的,意識的に子どもの内面理解や子どもの見方・考え方を捉えることが難しいが,指導補助の経験は,子どもを指導する立場に立つことによって,子どもの考え方や内面理解,子どもへの関わり方を把握する能力を形成することが可能になることである。

3つは,教職をめざす学生が在学中に指導補助者という指導的な役割を果たすことで,単に学生自らの自己理解や人間性といったものを豊かにするだけでなく,教職という職業意識の形成や教員としての資質向上へと発展する可能性が大きくなることである。

4つは,指導補助者という子どもへの指導経験は,大学等で習得した教育に関する様々な理論知を指導場面で行為へと転化し,その行為をその文脈において省察するという学習過程を経させることによって,理論と実践の統合,すなわち「生きた実践知」の生成を学生自身に促し,実感,自覚させることができることである。

4 本研究の成果と今後の課題

本研究は,兵庫県下の「自然学校」受入施設における青少年教育指導者を対象に実施した調査結果を手がかりに,社会教育における青少年教育指導を視野に入れた新しい学校教育の実現と充実を仮定した場合の,子どもの自然体験活動や野外活動等の指導で教員に求められる資質能力と,その形成を促す養成教育のあり方を解明しようとした。その結果,本研究の成果として以下の2点を述べることができる。

(1)「自然学校」受入施設における約6割の青少年指導者は,今の教員の自然体験や野外活動等の経験が不足していると思うと回答した。その理由として,教員の生育環境が知育中心で,学校教育の中での経験が少なかったことや,教員養成・採用が知育偏重で,採用後も知育偏重の教員生活や教育活動に従事していることといった文脈的背景と,その結果として具体的に出現する「野外活動における道具活用の技能不足・未熟」,「自然体験の指導力不足」,「施設指導員への強い依存」,「自然体験活動への意欲・関心のなさ」等の事例的根拠の両面から教員の経験不足を捉えていた。したがって,教員には子どもの頃に自然体験や野外活動等を経験する機会がより一

層求められる。

しかし，そうした子どもの頃の経験だけでは，教員になって子どもたちを指導する際，その経験が十分指導に生かされるとは言い難い。「自然学校」受入施設における9割以上の青少年指導者が強く望んでいたように，教職をめざす学生には，養成教育の段階で再び自然体験活動や野外活動等の参加経験が得られる機会が与えられるべきである。しかし，教員の指導資質能力の形成という観点からすれば，自然体験活動等への参加経験だけでなく，指導者や指導補助者としての経験を積むことが望ましい。

（2）子どもたちの自然体験活動や野外活動の指導では，「安全管理や安全指導の能力・知識」，「自然体験活動への関心・意欲」，「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」，「自然体験活動の目的・意義の理解と集団指導力」，「体力・健康」，「自然体験活動に関する知識」，「自然体験活動のための企画・指導技術」の7つの指導資質能力が教員には求められる。しかし，例えば「プログラムを推進するための状況予測力と対人関係能力」といった指導資質能力を身につけるためには，一斉講習では無理であり，学生自らが進んでそのような活動体験ができる場に出向き，経験しなければならない。

したがって，これら7つの指導資質能力を養成段階で身につけさせるためには，教員養成を担う大学が意図的，計画的に設定した自然体験プログラムを学生に経験させることによって指導資質能力を身につけさせることと，学生の自主性・自発性を尊重してボランティアで様々な体験活動に参加する経験を通して任意に学生自身の指導資質能力を豊かにすることとを分けて考える必要がある。特に社会教育関連の資格を授与できる制度を新たに設けたり，ボランティア活動の単位化を図るなどして，後者を促す対応がより一層求められる。

最後に，今後の課題としては，本研究の調査結果をより一層精緻で客観的なものにするため，自然体験活動の指導に関わった教員や参加した子どもたちの観点から，自然体験活動指導で教員に求められる指導資質能力を捉え直す作業が求められる。また，本研究の成果を基に自然体験活動指導の場で貢献し得るような「教員のための指導資料」の開発研究にも着手したいと考えている。

【注及び引用文献】

(1) 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（審議のまとめ）－子供に〔生きる力〕と〔ゆとり〕を－」，1996年6月18日。

(2) 文部省『小学校学習指導要領』，1998年，1-3頁。文部省『小学校学習指導要領解説 総則編』，1999年，3頁。

(3) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議『報告 青少年の野外教育の充実について』，1996年。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/96070/.htm

(4) 自然学校は，国の事業である「自然教室」の実施状況等を参考にしたもので，「学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し，児童が人とのふれあいや自然とのふれあい，地域社会への理解を深めるなど，さまざまな活動を年間指導計画に位置づけて実施することにより，心身ともに調和のとれた健全な児童の育成を目的」とし，県内の公立小学校5年生全員を対象に5泊6日で実施されている兵庫県の特色ある教育活動の一つである。（兵庫県教育委員会『自然学校10周年記念誌』，1998年，4頁。）

(5) 近年の自然学校の成果として以下の論文をあげることができる。

兵庫県立南但馬自然学校『平成11年度　研究紀要』，2000年。

兵庫県立南但馬自然学校『平成12年度　研究紀要』，2001年。

その他，子どもの行動変容とその影響要因を探究したものとして以下のものがある。

赤松幸子・千駄忠至「「兵庫県自然学校」における子どもの行動の変化とその要因について」，『第4回　日本野外教育学会研究発表抄録』，2001年。

(6) 自然体験活動に参加する子どもに焦点を当てた研究には，①自然体験活動による子どもへの心理的変化に焦点を当てた研究（叶　俊文・平田裕一・中野友博「自然体験活動が児童・生徒の心理的側面に及ぼす影響－少年自然の家主催事業参加者の過去の自然体験活動の有無からの比較－」，日本野外教育学会編『野外教育研究』4(1)，2000年，39-50頁。蓬田高正・飯田　稔・井村　仁・関　智子・岡村泰斗「長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響」，日本野外教育学会編『野外教育研究』3(2)，2000年，13-22頁。），②自然体験活動の効果と意義を明らかにした研究（谷井淳一・藤原恵美「小・中学生用自然体験効果測定尺度の　開発」，日本野外教育学会編『野外教育研究』5(1)，2001年，39-47頁。今泉紀嘉「自然体験活動による態度変容について」，『日本特別活動学会紀要』第4号，1995年，68-85頁。）③子どもの自然体験の実態を明らかにした研究（松井宏光「松山市内における小学生の自然体験について」，『松山東雲短期大学研究論集』第28号，1997年，147-153頁。），④青少年の自然体験活動の重要性を論説した研究（野田敦敬「初等教育における自然体験の重要性」，『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第4号，2001年，79-85頁。星野敏男「「生きる力」をはぐくむ体験活動のあり方」，『兵庫教育（10月号）』第53巻第7号，2001年，1-9頁。松下倶子「学校教育に生きる豊かな自然体験の在り方を探る」，『中等教育資料』6月号(No.712)，1998年，14-

19 頁。）がある。

その他に，各大学で授業科目として開設されている自然体験活動の意義と効果を明らかにした研究（山城久典・遠藤英子・風岡たま代・三ノ谷新子・唐國真由美・松本麻美・村井貞子「自然体験学習の評価及び事前学習の留意点」，『東邦大学医療短期大学紀要』第 14号，2000 年，47-55 頁。西谷好一「自然体験学習の意義と実施効果」，『園田学園女子大学論文集』第 23 号，1989年，191-207 頁。濁川明男・柴田好章「教員養成課程における体験学習の意義－自然体験実習の試みを通して－」，『上越教育大学研究紀要』第 18 巻第 1 号，1998年，91-103 頁。）も散見されるが，教員に注目した研究では，以下にあげる論文や事例紹介にとどまる。

香西　武・日垣正典・森　三鈴・畠山知恵・坂本晃章・塩田洋己・山本仁史「自然体験・社会体験学習実施に対しての小・中学校教員の意識－「総合的な学習の時間」への取り組み意識調査から－」，日本野外教育学会編『野外教育研究』4(1)，2000 年，51-58 頁。

国立吉備少年自然の家「教員の自然体験－主催事業「野外活動実践講座Ⅰ（学校編）」を通して－」，文部省編『文部時報』6 月号（No.1361），1990 年，42-45 頁。

(7) 前掲書，兵庫県教育委員会，1998 年，50 頁を参照されたい。

(8) 前掲論文，兵庫県立南但馬自然学校，2001 年，16 頁。

(9) 上掲論文，15 頁。

(10) 前掲論文，濁川・柴田，1998 年，103 頁。

付記

本研究で取り扱った質問紙調査の実施では，兵庫県教育委員会をはじめ，各教育事務所ならびに県内「自然学校」受入施設（活用施設を含む）の方々に深いご理解と温かいご協力を賜りました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

（2002.7.31 受稿，2002.9.17 受理）